

伊勢神宮 神苑会の業績
- 神宮徴古館・農業館に関連して -

建設工学専攻
建築史研究

ME11009 磯俣祐介
指導教員 伊藤洋子 教授

1. 研究の背景・目的

幕末から明治にかけて日本は近代化を行うことになり、様々な用途の建築が日本にも誕生した。近世には存在しなかった工場・鉄道・博物館等、産業施設から文化施設まで幅広く、建築にも急速に西洋化の波が押し寄せた原因となった。西洋化に 대응するために政府は欧州の技術者たちを日本に招き、日本人に西洋の技術を教えさせたのである。建築分野ではジョサイア・コンドルが最も日本に影響を与え、後の第一世代と呼ばれる、辰野金吾・片山東熊・曾禰達蔵・佐立七次郎の4人を育てる。その中の一人、片山東熊は宮廷建築家と呼ばれ、皇室関係の建築物を数多く設計する。特に明治期の博物館建築は片山が多数手掛けており、片山が明治時代の博物館を築いたと言っても過言ではない。

今回、神苑会に関連する図面が多数発見されたため、これらを整理・解析し神苑会の業績をまとめることを目的とする。また明治期博物館における神宮徴古館の立ち位置も明確にする。

2. 資料調査について

- (イ)2011年11月17日に三重県にある神宮徴古館・農業館にて資料調査を行った。
- (ロ)2012年5月12日に東京都中央図書館所蔵の木子文庫にて調査を行い、以下の資料を収集した。
- (ハ)2012年10月5日・6日に三重県の神宮文庫にて調査を行い、以下の資料を収集した。

表1 調査資料一覧

イ	1	神宮農業館の資料	58枚
	2	神宮徴古館の資料	156枚
	3	神宮徴古館及び神宮農業館共通の資料	27枚
	4	その他の資料	30枚
ロ	1	神宮文庫計画案通称図等集	1枚
	2	伊勢神宮司庁等集	1枚
	3	伊勢神宮(南宮)地下(伊勢)神域等集	1枚
	4	神宮司庁図面	4枚
ハ	1	伊勢神宮司庁図面	2枚
	2	神苑図集	1冊
	3	神苑関係資料	3冊
		農業館等集	1枚

3. 研究方法

- 神宮徴古館・農業館にて資料調査を行う。
- 資料によって得られた資料を整理・解析し神苑会の業績を明確化する。
- 神苑会に参加している人物をまとめる。
- 国立博物館における神宮徴古館の立ち位置を明確にし、神宮徴古館がどのような博物館であったのか明確化する。
- 以上によって得られた図面類の歴史的価値を考察し、神苑会及び神宮徴古館の意義を確立する。

4. 神苑会について

神苑会は明治19(1886)年に設立した私立団体で、有栖川宮熾仁親王を総裁とする。神苑会の業績を記述した「神苑会史料」には、「神苑会事業着手順序予定」が記述されており、それによると第一に内外宮神苑地の整備を行う、第二に倉田山に神苑地を設け、歴史博物館を建設することが主な目的として挙げられている。その事業を達成すると、神宮司庁に神宮徴古館・農業館を献納し、明治44年に解散する。設立した人物は太田小三郎等、三重県の実業家が設立した。

5. 神宮徴古館

5-1. 神宮徴古館概要

神宮徴古館は神宮に関連する様々な歴史的資料の展示、収集を目的とした博物館で、片山東熊と高山幸次郎の設計により明治42年に倉田山丘陵の現在地に建設された。その後昭和20年に焼夷弾によって外壁以外を焼失。昭和28年に角南隆によって現在の形に復旧される。

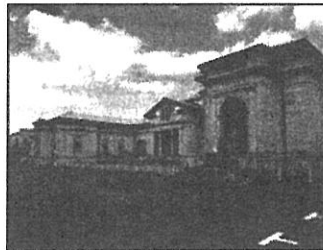


図1 神宮徴古館

5-2. 神宮徴古館建設過程

神宮徴古館は神苑会設立当初から会規則に記載されている歴史博物館のことである。明治22年まで、伊勢神宮少宮司である浦田長民を仮会頭とし三重県に関連のある人物が神苑会を運営するが、同22年に東京事務所が設立されると、これを境に土方久元・佐野常民・洪沢栄一等、国に従事する人物が神苑会に所属し、東京事務所に計画の決定権が移る。そのため国家的な要素を多く含む神苑会に変わる。なおこの時、「歴史博物館」から「徴古館」へと名称が変更される。

建設地は神苑会設立当初から倉田山神苑地に計画していたが、同28年に農業館建設地である外宮前神苑地に計画が変更される。同31年に片山東熊に耐火構造を目的として徴古館設計を嘱託する。同30年5月の建築雑誌に神宮徴古館に関する記述があり神道式の建築で建築すること、外宮前神苑地に建設することが挙げられているため、同28年～同33年の間に計画されていた図面である(図2)。この当時は片山の耐火構造と神道式の木造建築の二つが同時に存在していた事になる。

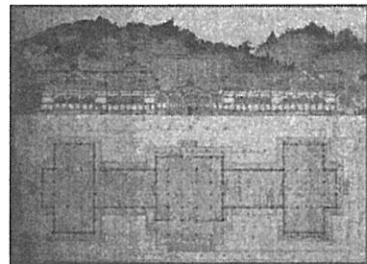


図2 木造徴古館案

外宮前に徴古館を建設することを諦め、再び倉田山に建設することが、同33年11月に決定する。その後同39年6月に徴古館建設地に縄張りを行い建設がスタートし、同時に地形工事を行った。同42年に竣工する。

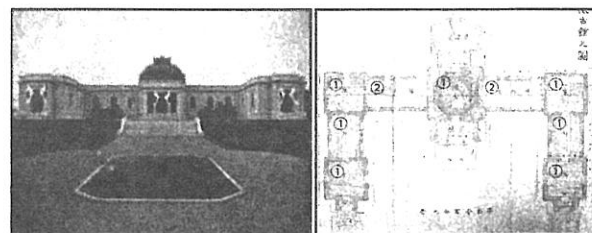


図3 徴古館竣工当時

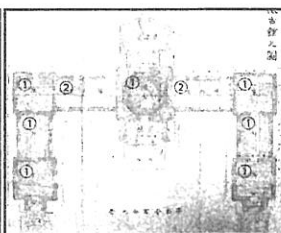


図4 徴古館平面図

図中の番号：①古器物室 ②絵画室 ③彫刻室

6. 神宮農業館

神宮農業館は片山東熊の設計であり、内容は建築学会計画系論文集に投稿した。

7. 御幸道路

明治36年に第五回内国勸業博覧会が大阪で開催され、大阪からの旅客流入と後に建設される神宮徴古館の通行に充てる目的を以て岩淵町～倉田山～久世戸町を通る道路(現県道37号線の一部)を建設する計画が起こる。同年7月には工事がほぼ完成し、今の道路の基礎が出来上がった。同40年にこの道路を改修する計画が浮上し、それと同時に外宮前神苑地の一部を新設道路の敷地として三重県に寄付し、同43年に現在の道路が完成する。

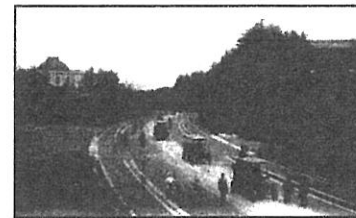


図5 御幸道路

8. 鉄道

8-1. 参宮鉄道

参宮鉄道(現 JR 東海参宮線)は明治22年、神苑会会頭吉井友実の勧誘に基づき、太田小三郎が設立を図った。同21年に三重郡菟野村の小河義郎等、14名が設立を発起するものの、殖産興業上無意味であることから鉄道局長は却下する。しかし、翌年に神苑会評議員の洪沢栄一等を加えて再び発起したところ認可が下りた。主として伊勢の旅客交通を目的として同26年12月に津一宮川間が開業、同30年に山田駅(現伊勢市駅)まで延伸し、同44年に全線開通する。宇仁田馨・渡邊洪基・太田小三郎等、神苑会に關係のある人物が社長・取締役を務め、同40年に国有化される。

8-2. 伊勢電気鉄道

伊勢電気鉄道は宇治山田の市内電灯の供給を目的として設立された「宮川電気(明治30年)」が余剰電力を活用する為に「伊勢電気鉄道(明治36年)」と名称を変更して明治36年に山田一見間の電気鉄道が竣工した路面電車である。設立者は太田小三郎等の神苑会の人物が設立し、昭和36年に廃止となる。

神苑会は明治40年の御幸道路改修と併せて、外宮前神苑地の一部を伊勢電気鉄道に売却し、外宮前駐車場の建設場所として計画を始める。史料調査(イ)にて外宮前駐車場の図面も確認できた。

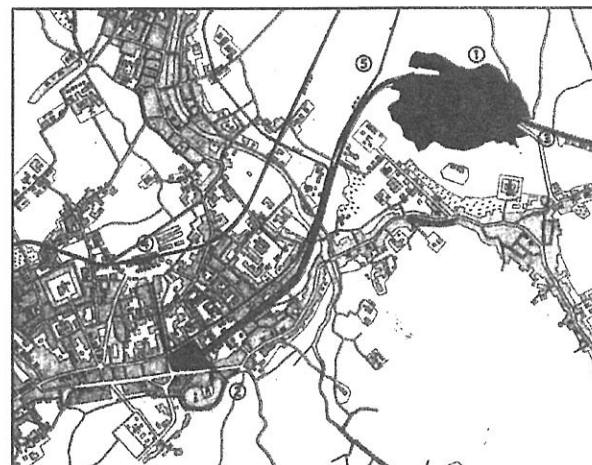


図6 明治42年頃 倉田山周辺図

- ① 倉田山神苑地 ② 外宮前神苑地 ③ 御幸道路
④ 参宮鉄道 ⑤ 伊勢電気鉄道

9. 国立博物館における徴古館

9-1. 帝国奈良博物館

帝国奈良博物館は明治22年に建設計画が始まり、明治27年に竣工する。片山東熊・宗兵蔵の設計である。採光は彫刻室・絵画室共に天窓であり、古器物室は側窓からの採光である。博物館における天窓の計画は京都と並んで初めて計画されたものである。

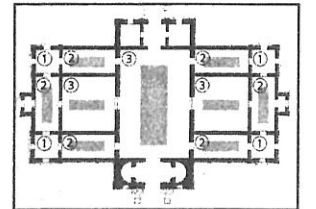


図7 帝国奈良博物館平面

図中の番号(図7,8,9)：①古器物室 ②絵画室 ③彫刻室
図中の四角は天窓の位置を示す。

9-2. 帝国京都博物館

帝国京都博物館は明治22年建設計画が始まり、明治28年に竣工する。片山東熊・足立鳩吉の設計である。採光は基本的に天窓であるが、古器物室が側窓及び天窓の両方の計画である。

各室は起工に際し、仮の室名称としたが確定したものではない。そのため片山は展示する内容を知って各室の計画を進めたものではないと思われる。

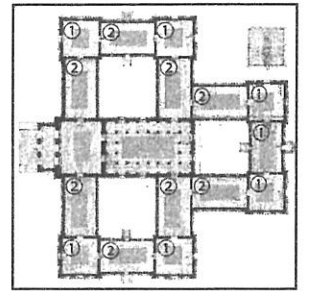


図8 帝国京都博物館平面

9-3. 表慶館

表慶館は大正天皇の御成婚を記念して建設された美術館である。明治34年に起工し明治42年に竣工。片山東熊・高山幸次郎の設計である。開館後は美術及び美術工芸の陳列館として利用され、日本初の本格的な美術館である。

二階は全て絵画室となっており、中央の二部屋は天窓採光のみであり、左右の二部屋は側窓及び天窓の両方をとっている。また陳列品に関しては、竣工後に表慶館陳列品調査委員会が組織され、展示に関する案が決定する。

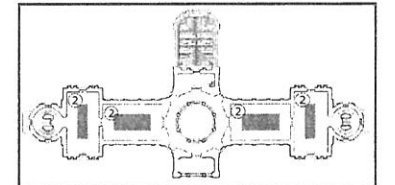


図9 表慶館2階平面

9-4. 神宮徴古館

室は全て側窓採光となっており、中央講堂は高窓採光となっている。また竣工した後に陳列配置計画を行っていることから片山が計画するに際して細かい配置が決まっていなかったと思われる。また絵画室も古文書のような展示物であったため、表慶館の絵画室とは異なる。(図4参照)

10. まとめ

神苑会の業績は以上のように多岐にわたる活躍であり、鉄道・道路などの公共事業は全て倉田山神苑地の為に計画されたものであった。そして神宮徴古館は関係する人物は国家事業に関わる人物ばかりであるため、徴古館は私立博物館ではなく国立博物館に近い存在であったと思われる。

参考文献

- 藤井清司著「神苑会史料」神苑会清算事務所 1911年
- 宇治山田市役所発行「宇治山田市史」 1929年